

浄土

1978-4

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 運輸省 (特別授承認雑誌) 第三三五号
昭和五十三年三月二十五日印刷 昭和五十三年四月一日発行
第四十四卷 第四号



S. Kuz

小学一年生



四月初旬のある日、街を歩いていると、道から低い塀
ごしに見える家の前で、ピカピカに光った新しいランド
セルを背にした子供を真中にして、家族で記念写真を写
している光景に出会った。そういえば今日は小学校の入
学式の日だった。正装した母親と一緒に、今、入学式か
ら帰ったところらしい。子供は、身体の割に大きなラン
ドセルが下りぎみになるのを気にして、両手でバンドを
もって上にすり上げながら恥ずかしそうにはにかみ笑い
をしている。でも得意そうにこの場の主人公になりきっ
ている。今日から小学一年生、はじめて世の中の公式の
機構に参加できたわけだ。記念すべき日だ。前途は永
く、いろいろな障害が、早く来いといわんばかりにこの
子を待ちうけているに違いない。それをうまく乗り越え
てこれからどう成長して行くだろうか。見ず知らずの私
にとってこの子供の将来はまったく予測がつかない。け
れども、子供の姿を見ていると、春の若葉よりも花より
もみずみずしいなにかがあり、限りない夢と希望を抱か
ざるをえなかった。本当に春の息吹を感じる街の光景の
一齣であった。

(佐藤成順)

四月号

信をば一念にむまるととり
て、行をば一形にはげむべし
——『禅勝房にしめす御詞』



目次

花祭り俳談……………細田隆善……(2)

自然と人間……………奈良博順……(6)

利休と仏教・その「佗び」(一)……………河野喜雄……(20)

＜ふるさと紀行＞刺繍曼荼羅縁起について…旭俊正……(26)

自然を考える①＜文学と自然＞

シリーズのテーマ……………(10)

作家の自然描写……………八木義徳……(11)

蕪村の春の句をめぐる……霧林道義……(15)

＜随想＞春の花々—思うがままに—……………井上信光……(31)

浄土句集……………一田牛畝選……(25)

＜読者の便り＞ある死亡通知……………吉田勇之助……(34)

ハガキ通信再録……………(36)

＜表紙裏・巻頭言＞小学一年生……………佐藤成順

念仏ひじり三国志④——法然をめぐる人々……………寺内大吉……(37)

表紙 久住静雄画

カット 大正大学美術部



花祭り俳談

細田隆善

(東京・三好勢至院住職、俳号豊明)

○ 灌仏会

灌仏の日に生れあふ鹿の子かな

芭蕉

灌仏や皺手合はする数珠の音

芭蕉

この二句は、花祭りを吟じた芭蕉の有名な句である。

四月八日釈尊の降誕を祝す灌仏会の行事は、承和七年(八四〇)はじめて宮中において修して以来宮中の行事となり、一般民間にひろまり、親しまれる行事となった。

釈尊の母マヤ夫人はお産のため生家のデーダバハ城に向われた。途中ルンビニ園の無憂樹の花の下、母の右脇から誕生せられ、七歩歩いて右手で天を指し左手で地を

指し、「天上天下唯我独尊」と唱えられたと仏伝は伝えられている。このとき天の神々は、釈尊を香水で洗浴し、八大竜王は雨を降らして沐浴したというこのことから天地を指した裸形の可愛い童姿の釈尊に、甘茶をかける花祭りが行われるようになった。昔は花祭りは四月八日。陰暦であるので現在の五月ごろの季節である。花祭りは、江戸の初期から俳句の勃興とともに俳句の季題となつて親しまれてきた。

灌仏会は、浴仏節、浴化斎、お灌仏などといい、いずれも俳句の季語である。

前掲の芭蕉の句の第一首は、芭蕉が貞享五年(一六八八)、吉野紀行の旅にできとき、奈良にたちより、奈良の寺の灌仏会に詣り、たまたま鹿の子の生れたのを見て、

詩情が湧きこの句を吟じた。釈尊誕生の日に鹿の子が生まれたことの面白さがあり、背景に若葉の風景を想像させ、若々しさにみなぎった句である。この幸せの日に生れた鹿は、つぎの世に生れ替ってさらに幸せになるであろうと芭蕉は思ったのであろう。

芭蕉はこの句を吟じて、つぎに唐招提寺に赴き、鑑真和尚の盲目の像に感激し、つぎの有名な句を残した。

若葉して御目の雫ぬぐはゞや

芭蕉

前掲第二句の灌仏会の芭蕉の句は、元禄七年（二六九四）、深川芭蕉庵にいたころの句である。翌月五月十一日、この句を残して芭蕉庵をあとに関西への旅に出て、十月十二日五十一歳を一期として不帰の人となった。この句は深川の寺町の灌仏会に参詣し、お年寄りが皺深い手を合せて数珠をもみ、その数珠の音が、若々しい誕生仏と対比して、哀歎の詩情を感じた句であり、芭蕉自身が人生五十年の老いをしみじみと感じた句である。

○ 仏生会

浜風に色の黒さよ仏生会

一茶

釈尊降誕会は、俳句の季語として、仏生会、仏誕会、誕生会、降誕会ともいう。

俳人一茶は、芭蕉と異なる作風があり、特有の個性がにじみ出て興味深い。この句は海岸の仏生会、釈尊誕生仏が金銅仏の黒いところに着目した句である。この黒い誕生仏が、浜の漁士や子供たちの黒々とした顔がしのばれて面白い句である。

ぬかづけばわれも善女か仏生会

久女

雲のあゆみ水の行くかたや仏生会

白雄

前句は、善男善女の人々とともに仏生会に参詣した女性の句である。われも善女といったところに女流俳人らしい面白さがある。

後句は、仏生会の寺の風景、行雲流水を吟じ、人生の心象の世界を表現した句である。

○ 甘茶あまぢや

雀らがざぶざぶ浴びる甘茶かな

一茶

甘茶は、釈尊誕生仏に小さい竹びしゃくでかける甘茶のこと、本来は香湯であるところから五香水、五色水ともいう。当初は諸大寺か宮中においていろいろな香料を使用したお湯を誕生仏にそそいだものである。江戸時代になって甘茶をそそぐようになった。甘茶は木甘茶きあまぢやの葉と甘草かんぞうをせんじたもので、甘味のあるところからこの名がつけられた。寺によっては新しく切った竹筒の容器を参詣者に与えるところもある。

甘茶は俳句の季語、甘茶から甘茶寺、甘茶仏という季語もある。

前掲一茶の句は、人がいなくなった甘茶仏のところ、雀がよってきて、甘茶をあびているめずらしい光景をとらえた句である。この句の命は「ざぶざぶ」の一語にある。きわめて俗っぽい語を使用して写真の妙を得、句を生かしている。一般に句作の形からいえば「雀らの」とするところを「雀らが」としたところに一茶の個

性が生かされ、語意が強くひびく。

老の尼甘茶もらひの子にやさし

風生

この句は甘茶を与える老尼僧と甘茶をもらいに来る子供の対比の妙が面白く、やさしさの満ちた句である。

地を指せる御手みてより甘茶おちにけり

草田男

天地を指す誕生仏の地を指す左手の指先から甘茶の雫が滴っている細かい情景をとらえた句であり、誕生仏への愛情がこもっている。

○ 花御堂はなみどう

蚊屋つりの草もさげてや花御堂

千代女

花御堂は、屋根にいろいろな花をつけ、四本の柱をたて、その中に浴仏盆という水盤をおき、甘茶をたたえたもので、いかにもやさしく美しい。花御堂は、俳句の季語であり、花の亭、花亭ともいう。

千代女の句は、蚊帳吊草で遊んでいた子供が、その草を下げたまま、花御堂へ甘茶をかけに、甘茶をもらいに来た情景をとらえた句であり、いかにも女流俳人らしい繊細な句である。

二三文銭もけしきか花御堂

一茶

花御堂に賽銭として投げられた二三個の一文銭が水盤に沈んでいる情景に詩情が湧き吟じた句である。

静かなる上野の雨か花御堂

斌雄

上野の寺の花御堂に静かな雨が降っていて、参詣者が少なく寂しくなったところを吟じた句であり、静かな雨が、花御堂のやさしさとよく調和した句である。

境内の花を集めし花御堂

豊明

○ 花祭り

花祭後れじと蹤く風の稚子

友二

花祭りは、いうまでもなく釈尊降誕会のこと。第二次

大戦前、浄土宗では灌仏会は文字がむつかしく、桜の咲き盛る季節であるので、花祭りと呼称し、子供に親しまれる呼称となったのが最初であり、俳句の季語としては新しい。その後、各宗を通じて花祭りと称するようになり、また各宗提携して社会教化の一端ともなった。花祭りには白象を仕立てて稚児行列をしたり、花祭り子供会などが各地で華やかに行われてきた。大阪四天王寺の花祭りは各宗合同で盛大に行われる。東京では戦前、日比谷公園での各宗合同の花祭りが有名であった。

前掲の友二の句は、花祭り稚児行列の子が後れまいとして小走りについてゆく可憐の様子をよくとらえた句である。

わらべらに天かがやきて花祭

蛇笏

春日が燦々と輝やき、花祭りの子供たちが華やき、いかにも明るい情景を句にしたものである。

白象の背に花御堂乗せて曳く

豊明



自然と人間

奈良博順 な ら はく じゅん

(筑波大学助教授)

一

三月も半ばを過ぎ、お彼岸に入る頃には、「一陽来福」という言葉が似あう陽気になってくるのが普通である。ところが、今冬はやや気候が不順といわれ、前半は暖冬であったが、後半はしばしば激しい寒気に見舞われた。この様子では春もいささか遅れるのでは、とも思われる。

冬が暖かいことは、私達にとってまことに有難いのであるが、冬を相手に商売する人達にとっては、深刻な問題になりかねない。衣料品関係の人から、昨年末は暖かだったため、冬物が思うように売れず、毎朝起きると寒

暖計を見ては一喜一憂したという話を聞いた。不景気と暖冬が重なっては、と同情するのであるが、といって、自然が相手では文句のつけようがない。こういう問題は衣料品関係の人達ばかりでなく、私達の生活の多くの面に見られる。農業のような生産活動をはじめレジャーに至るまで、私達はどうにもしようのない自然を相手に生活している。

しかも、どうにもならないことを知りながら、天候の順、不順を口にせずにはおられない。それは順調であるのが当り前で、不順であるのがけしからんと、なじっているようでさえある。

かつては「晴耕雨読」(晴天ならば田畑を耕し、雨ならば

家で読書をする」といわれた、社会構造の変ってしまった今日、そういう生活そのものを期待することは無理であるかもしれない。しかし、そのような自然に対して素直な生活態度はとれないものであろうか。

二

ところで、天候の順、不順は、何によって判断するかというと、まず私達の生活経験にてらして決める。冬といえ、これまでの生活経験からつくりあげられた冬についての一種のイメージがあつて、これに似ているかどうかで、今年の冬は寒いとか、暖いとかいうのである。

こういう日常経験からくる判断に対して、今日では天気予報という、天候についての過去のさまざまなデーターや現在の気象状況にもとづいて出される科学的な判断の方が信頼され、用いられている。天気予報について、私はまったくの素人であるが、これとてあくまで予報であつて、必ずこうなるという種類のものではないであらう。だが一般には天気予報は明日、場合によってはそれ以後の天候を、正確にあらかじめ知らせることのように受けとられているのではないだろうか。そのために、明

日は曇りという予報が出されていたのに、雨でも降ろうものなら、天気予報はけしからんということになつてしまふ。

一体、天気予報に限らず、自然科学的判断とか思考といわれるものは、ある事柄についての、特殊で個別的な沢山なデーターを集め、そのデーターにもとづいて、一般的あるいは普遍的といわれる法則や原理を導き出そうとするもの、と一応いえるであらう。ここで注意しなければならぬことは、一般的とか普遍的とかいうと、いかにもそれがあらゆる場合に通じ、絶対不変であるかのように受けとられることである。だが、科学的な法則や原理は、単純なものの方が複雑なものよりわかりやすいから、多様な現実をより単純な仕方の説明しようとするものであつて、それ以上でも以下でもないのである。それは確かに私達が日常経験から下す感覚的直観的な判断や説明に比べれば、より厳密で妥当性は高いかもしれない。しかしそれによって多様な現実をすべて説明しつくすことはできないのである。

それは丁度既制服のようなものであるといえよう。既制服は何種類かのパターンを用意しておいて、多くの人

の需要に応じようとするもので、自分の体形に近いものを選べば、なんとか恰好はつくのであるが、注文服のよきにピッタリとはいかない。いわば誰にでも合つて、誰にも合わないのが既制服であらう

科学的方則や原理も、これと同じであらう。それは現実についてのおよその説明ではあつても、個々のものについての説明にはなりえないのである。

三

先にあげた天気予報にしても、過去のさまざまなデータ等から予測するのであるから、およそのことはいえても、必ずそうなるというわけにはいかないであらう。だから台風のコースが予想よりずれたり、思わぬ大雨や突風に見舞われたりする。人間が勝手に天候の予想をし、その通りになるように思いこまれたり、天候のせいで自分の仕事が思うようにならなかつたといつて不平をいわれては自然にとって、まことに迷惑な話であらう。

私達は人と社会については、その複雑さを行い、無常をいい、人生の厳しさを嘆く。しかし自然現象については、あたかも年々歳々同じことを繰返すように思いこみ、

またそれを期待しているのではないだろうか。たしかに春夏秋冬という変化は、その通りであり、この日本で真冬の気温が三〇度を越すことはまずないであらう。しかし、同じ種類の花でも、はたして年々同じであらうか。自然の一部である人間の身体が十人十色であり、年々変化していくように、同じ種類の花であつても、一輪々々をとつて見れば、その色、その匂いが、微妙に変化しているのではないだろうか。

四

近世以来、今日の原子力の発見・利用にいたるまで、科学の進歩にはまことにすばらしいものがある。次々に自然のベールをとりはらい、未知の世界に光を当ててきた。それによつて得た自然についての知識を利用して、科学文明あるいは物質文明は高度にすすみ、私達の生活を大幅に変え、とどまるところを知らないように思われる。だが、その反面自然破壊や公害を生んでいることも事実である。つまり科学文明の進歩が、一方で人間の生活を豊かにしながら、他方それを破壊していくという皮肉な結果が出てきている。

どうしてそういうことになったのか、それは結局、近世以来の科学文明の進歩が、人間の力に対する過信を生んだからではないだろうか。それまで自然の力に左右されてきた人間が、科学の進歩によって得た自然についての知識を利用して、自然を改造したり、その力を利用することをおぼえた。そのこと自体は、人間にとって、すばらしいことであろう。だがその結果、自然を人間の召使いのごとく考え、一方的に人間のためにのみ自然をとらえ、利用することに熱中してしまった。つまり人間の尺度でしか自然を問題にしなくなってしまったのではないだろうか。

科学的知識といっても、所詮それは人間の目を通して自然の世界を知るにすぎない。それによって、自然の世界がすみずみまで明らかになるものでもなさそうである。私達は、自然に対する接し方を根本的に考えなおさなければならぬ時期にきているのではないだろうか。

人間が他の動物よりすぐれている一つは、道具を作り出すことにあるといわれる。科学文明の進歩は、それを象徴しているといえる。だが性能のよい高度な機械から、台所用品にいたるまで、その素材はといえば、石油

であり、石炭であり、あるいはその他の鉱物資源である。しかもそれらは人間が作り出したものではない。今後のエネルギー源といわれる太陽熱にしても、原子力にしても、それらはすべて自然が作り出したものである。人間にとってそれらはすべて「自然よりの恵み」である。これまで、人間の力の偉大さは説かれても、その人間が絶えず自然に助けられ、育てられていることには、あまり触れられてこなかった。それは人間の生活が自然の大きな営みの中の一部でしかないことが忘れられているからではないだろうか。

法然上人が「法爾ほうにの道理」といい、親鸞聖人が「自然じねん法爾」といったのも、人間を含めた大きな自然の世界をいつているのであろう。寒さが長引けば、桜の开花はおくれ、新緑もおくれる。晴耕雨読というのも、つまりはそれと同じではないだろうか。

私達はもっと自然と密着した生活、自然と共に生きる生活を工夫しなければならない。それは単に自然に親しむなどというきれいごとの生活ではないであらう。そのような生活は、自然を単に人間の心の慰めものにしか考えていないからである。

シリーズのテーマ

春、夏、秋、冬という四季の折々の変化が、私たちの目を楽しませてくれる。澄みきった青空の日、心も沈むような曇天、小雨、大雨、雪降る日など、天候の変化も決して単調ではない。緑の山、青き海、小川のせせらぎ、悠々たる大河。花々が開き、小鳥や小虫たちも飛びかい蠢く——私たち人間を育てはぐくむ自然は、まさに壮大にして微妙な天然のパノラマである。

しかし今日、私たち自身が営んできた現代文明の加速度的な進展は、そうした大宇宙の自然の摂理を少しづつ変えて、人工的な生活環境の構築にいたずらな努力を強いている。確かに、文明の利器は私たちの生活を明かるくし、きわめて役に立つ便利な道具としてまことに有効であった。そして次々と新しくもたらされる科学の成果は、私たちの生活状況を合理的に発展させ、その習慣そのものまで次第に変容させ、未知なるものへと押し進めて行くのである。けだし、現在はその文明の発展の速さにまず驚かされてしまうほどであり、現代文明という乗りものに乗り遅れてしまう人々だって決して少なくないほどである。そこでこうした文明科学の進歩に対して、いささかとも疑問を投げかけ、改めて人間一人一人のあり方を尋ねようという試みは、しばらく前から歴史の反省として取り沙汰されていることでもある。

こうした折に、このシリーズで「自然」を考えようというのは、もはや二番煎じ、三番煎じの謗りをまぬがれないありきたりのテーマでもあるし、また本欄にとってはあまりにも大きな問題に過ぎるテーマでもある。しかしかつて、現代人のこのころのことを考え、また人間のいのちについて考えてきた私たちは、今回は、私たちを大きく包む自然について、一個の人間として思いを寄せてみたいのである。

(編集部記)

自然を考える

(一)

—文学と自然—

作家の自然描写

あたえられた「文学と自然」というテーマは、あまり大きすぎて、この小文では意を尽くすことがむずかしい。ここでは、一作家としての実作に即した経験を語ることで、おゆるしを願いたい。

私の親しいある女流作家は、小説を書いていて、自然描写のところへくると思わずほっとする、という、それから「舌なめずりするような気持」で、その自然描写にとりかか

作文

八^や

木^ぎ

(作^{よし}

家^{のり}) 義徳

る、という。

ところが反対に、私の方は、小説を書いていて自然描写のところへくると、たいていの場合、「厄介なことになったな」と思う。そこでペンを置いて、たばこに火をつける。せっかくの筆の流れがそこで止まってしまう。

その女流作家のS女は、浅草の雷門に近い老舗の呉服問屋の娘としてうまれ育ったひとである。いわば生ッ粋の「下町っ子」だとい

っていい。

私の方は北海道の南のある港町に生まれ育って、小さいときから海や山をあそび場とした、いわば自然の「野生児」だといっていい。

この二人の置かれた自然環境という点からいえば、S女のほうははるかに遠く、私のほうははるかに近い。それでいながら、小説のなかでの自然描写ということになると、A女のほうは「舌なめずりするような」気持ちになり、私のほうは「厄介なことになった」という気持ちになる。

これはどういうわけのものだろう。

むろん、この反対の例もある。

たとえば、ロシアの大地主・貴族の家に生まれたトルストイの小説には自然描写が多いが。モスクワの貧民病院の医師の息子として生まれたドストエフスキーの小説には、自然描写といえるほどのものはきわめてすくない。

しかしこれは、常識的にうなずけること

だ。それならS女と私の場合は、どういうことになるのか。

私にとって自然はあまりに親しい存在であった。いや、親しいなどという以上に、私自身はいわば「自然」というものの中にドブ漬かりに漬かって育った人間である。私は自分という存在を、自然と切り離して眺め、考える、という習性をほとんど持たずにすごしてきた人間であった。いいかえれば、自然は私にとっては、対立的な存在ではなかった。

ところで文学的表現とは、「見るもの」と「見られるもの」と——この二つのものの対立、抗争、葛藤のなかから生れるものである。すくなくとも、この「見るもの」と「見られるもの」との劇的緊張のなかから生まれない言葉は、人を打たない。それは死んだ言葉にしかならない。そうして、死んだ言葉をいくら積みかさねても、それは文学的表現とはならない。

自然のなかにドブ漬かりに育ち、自然を対

立的存在として眺め、考えるという習性という私は、自然とのあいだに「見るもの」「見られるもの」という劇的な緊張関係を保持することがむずかしい。

その劇的な緊張関係を保持するとすれば、私は私自身を意識的に、そして強制的に「操作」しなければならぬ。すなわち私は、私自身を「自然」というものから無理矢理ひき剝がして、自然とのあいだに「見るもの」「見られるもの」という対立関係をつくらなければならぬ。

小説の自然描写ということについて、私が厄介だなと思う気持は、この自然との対立関係をいったん設定した上で、しかもそれとの劇的緊張関係を意識的に、かつ強制的に「操作」する、というこの作業が厄介だからであらう。

しかし一方、浅草の雷門という盛り場近くに育ったS女にとって、身じかにある自然といえは、せいぜい隅田川くらいのものだらう。

う。だがその隅田川も半ば人工化された自然にすぎない。

もし彼女が自然らしい自然を見ようとすれば、彼女はその置かれた環境から脱出して、外（そと）へ出かけなければならない。なぜなら彼女にとって、自然は「外」にあるからだ。しかも、その外なる自然は、大都会の間臭のうずまく盛り場から脱出した彼女にとって、とくべつ鮮度の高いよろこびと安らぎをあたえるにちがいない。

そういう彼女が、小説を書いている途中、自然描写のところへくると、思わず「舌なめずりするような気持」になるというのも、彼女が単に「自然好き」であるためばかりではないだらう。

彼女にとって、自然はあくまで外（そと）にあるものであり、したがってそこには「見るもの」「見られるもの」という対立関係が、私の場合のように、意識的かつ強制的な操作を必要とせずに成立する、という理由もある

にちがいない。

夏目漱石は未完の遺作となった「明暗」を執筆中、「こういうものを書いていると、心が大いに俗了されるので、仕事は午前中だけで、午後はもっぱら絵を描いてくらしめている」という意味の手紙を、弟子の一人に送っている。漱石の描いているという絵は山水を主とした南画風の絵である。

周知のように漱石は、彼自身のもつ我（エゴ）に終生苦しんだ人間であり、その人間のもつエゴイズムを文学的主题として、終生一貫、これを追及しつづけた作家である。

とくに「明暗」は、作中人物のほとんどすべてが、それぞれのエゴイズムを醜くさらけ出して、果てしもなく陰湿にからまり合う、という、いわば漱石文学の集大成といっている作品である。

こういうものを毎日書いていれば、漱石ならずとも、息苦しくなつて、どこかへ逃げ出さなくなるにちがいない。そこで漱石は、人間

臭のまったくない南画の世界へ逃げた。つまり彼は「自然」の中へ逃げた、といっている。しかし、このとき漱石の逃げた「自然」は、山とか川とか海とかという、いわゆる「風景」としての自然ではない。彼自身と彼の作中人物のもつエゴイズムという醜い人間悪の救済者としての自然である。

美しい自然に無心に対したとき、われわれはおのずからわが心が洗われるのを感じる。それは「おのずから」のものであつて、意識的な努力を必要としない。

自然というものの持つこの不思議な浄化力は一体どこからくるのだろうか。

昨年の三月中旬、私は仕事上の必要があつて、北海道へ流水を見に出かけた。網走^{あほしり}と知床半島のウトロと、それからノサップ岬の流水を見た。おなじ北海道に生れながら、私はこれまで流水というものを見たことがなかった。

私のはじめて見る壮麗な流水は、圧倒的な

迫力をもって私を打ちのめした。それは単に美しいだけのものではなかった。また私の心の汚れを浄めてくれるだけのものでもなかった。

その純白の大流水群を前にして、私はただ息を呑んでいた。全身が空（からっぽ）になっ

蕪村の春の句をめぐって

もともと「自然」という語は、おのずからなる生成・展開によって成り立っている状態をいう語であつたろう。そうすれば、この宇宙の森羅万象をも意味することになる。

けれども、私は今「文学と自然」という題を与えられ、この「自然」の語を、文学作品

ていた。そのうち、私の内部に強烈なエネルギーが、潮のように満ちあふれてくるのを感じた。

このとき、自然は、私にとっては「美」でもなく、「浄化力」でもなく、まさしく「生命力」そのものであつたのである。

詩

霧 林 道 義
きり ばやし みち よし

(詩人)

の対象となつた「素材」というほどの意味に用いたい。

書こうとして、ふと私に与謝蕪村の句が思い浮かんできたからである。

蕪村に次のような句がある。

菜畠にきせるわするる接木かな

この蕪村の句は、いつ、どういう状況のもとで創られたかは、あきらかでない。

だが、とにかく田夫が、のどかな春の菜畠のほとりで接木をしている。かれは暖かい風につつまれながら仕事をしていて「きせる」を忘れたのだ。

この句を思うとき、私にはいつも、春の野をわたる、あのかぐわしい風が漂いはじめる。もうすこし、私的なことに立ち入って言えば、私の亡父は、柿の木の接木を試みるのが好きであった。

父は、先ず渋柿の台木をえらび、それを50糎くらいの高さに切る。つぎに台木の切り口の樹皮をすこしさき、そこに削いだ甘柿の小枝をさしこむ。さしこむと台木の樹皮の上から藁縄でこれをかたくしぼる。台木の切り口には濡らした土を塗りつけ、その上を葉ランでおおう。葉ランの両端はまた台木にしぼり

つけられる。できあがって、これを見ると柿の木が頬かむりをしているように見えた。

失敗すること、成功することもあった。

少年の私は、いつも黙々と仕事をする父のそばで、そうした半日を過ごすのが好きであった。

この蕪村の句を思うと、私の少年の日の想いも、また甦ってきたりする。

◇

いったい与謝蕪村は、どのようなことを考えて、句を創っていったのだろうか。

はじめに、蕪村の春の句を連記してみよう。

畑うつやうごかぬ風もなくなりぬ
春雨やものがたりゆく蓑と傘

日くるる頃嵐山を下る

嵯峨へ帰る人はいづこの花にくれし
垣ごしにものうちかたる接木かな
ゆく春やおもたき琵琶の抱ごころ

花に暮れて我家も遠き野道かな

橋なくて日くれんとす春の水

さくらより桃にしたしき小家哉

畑打はたうちや我家も見えて暮れかぬる

春風や堤長うして家遠し

春の水すみれつばなをぬらし行く

これらの句には、いかにも、やわらかな作者蕪村の詩情がうかがえてくる。

勿論、ここにかかげた作風が、蕪村の全貌を示すものではない。

だが、これらを読むと、すぐれた詩人たち（広い意味での）が、すべてそうであったように、蕪村もまた、自己の感動を最も純な姿において表現しようとしていた作者であったことが知られてくる。

「春泥句集序」によれば、蕪村は、俳諧の要諦として、次のようなことを述べている。

俳諧は俗語（注、日常の言葉）を用て俗を

離るるを尚ぶ

という。俗を離れることの第一である旨をいうのだ。またかれは、春泥舎召波の、

自然に化して、俗をはなるる捷徑ありや

という問いに対して、

あり。詩を語るべし。子（注、召波を指す）もとより詩を能よくす。他にもとむべからず

と言った。貴殿は、漢詩をよくするのだから、漢詩を論じて、その風雅をさとれと言ったのである。

召波は、荻生徂来の弟子、服部南郭に詩を学んでいた者でもある。

南郭は、その「灯下書」に、

詩の教は溫柔敦厚をもととする事にて、心竟君子の志を述る物にて、ものごとに温和に、人をも浅く思ひすてず、云出ること葉も婉曲にして、何となく人の心を感じしむるを專一とす

と、その「風雅の情」を述べている。

また同じ徂来門の大宰春台は、詩とはいかなるものでなければならぬか、について、

其ノ辞温厚ニシテ慢(ゆるやか)ナラズ、質実ニシテ俚(いやしく)ナラズ、方正ニシテ角ナラズ、……華麗ニシテ浮ナラズ、怨ジテ怒ナラズ、愛シテ私ナラズ。其ノ義天下ノ中正ヲ極ム

というものでなければならぬと言う。

召波の周囲の漢詩人たちが、どういふものを目ざしていたかが、これで知られる。

自然は、いつでも自然であるのだが、それ

を見るひとは、いつでもほとんど「中正」を失ってゆく。私情にくらまされるのだ。

「中正」を失った眼には、いつでもまた「俗」なるものしか写ってこない。

蕪村が自然を見、それを写しとるとき、そのあらわされたものは、ある精彩をもったものとしてよみがえる。かれにも「愛シテ私ナラザラン」とする鍛錬のあった故であらう。

召波はまた、先の問答のあとで、

それ詩と俳諧と、いささか其の致を異にす。さるを俳諧をすてて詩を語れと云、迂遠なるにあらずや

すると蕪村は「芥子園画伝」の語を借りて答えた。

画家に去俗論あり。曰く、画、俗ヲ去ルコト他ノ法ナシ。

多ク書ヲ読メバ則チ書卷ノ氣上升シ、市

俗ノ氣下降ス。学者、其ノ慎シムベキハ
コレナルカナ。それ画の俗を去だも、筆
を投じて書を読ましむ。況んや詩と俳諧
と、何の遠しとする事あらんや

ここで召波は自得する。

「市俗ノ氣」があれば、俗を去ることがで
きない、と画伝は言う。「市俗ノ氣」とは、
あきなって儲けようとする気持ちをいうので
あろう。

ここでも、利功・打算を考える——そうい
う私情に支配されるところに「俗」におちい
る陥穽があるとした。

蕪村が「俗をはなるる」といったのは、例
えば、春台のいう「愛シテ私ナラズ」という
ことではなかったか——と私は考える。
なぜなら、蕪村のすぐれた句は、すべてそ
ういう私情が脱落しているからである。

◇

蕪村には、また次のような句がある。

なのはなや昼ひとしきり海の音
さびしさに花さきぬめり山ざくら
鶯に終日遠し烟の人

こうした蕪村の句を読むとき、私は、自ら
のなかに、素直でかつしみじみとした心情の
湧き出してくるのを覚える。

蕪村は、句のできた時の自分の心情を次の
ように書いた。

——恍として一人自らたたずむ。

時に花香風に和し

月光水に浮かぶ

この消息を、蕪村は「自然に化す」と言っ
たのであろう。

——筆者は、現代詩人会会員。詩誌『壺』主催。

利休と仏教・その「佗び」(一)

河^{こう}野^の喜^{よし}雄^お

(文芸評論家)



一、利休の略歴

千利休(一五二一—一五九一)は、堺の納屋衆、千与兵衛の長男であり、幼名を与四郎と言った、その先祖は安房の里見源氏、太郎義俊であり、その二男、田中五郎の子孫が山城国に移住して来た。千阿弥に至って、足利義政の同朋衆となったが、応仁の大乱を避けて堺の地に移った。千阿弥の長男が与兵衛であり、その千字を取って千氏を称し、今市町において魚商を営み、一代にして能

く産を成して、遂に納屋衆とまでなったのである。

与四郎は天文六年(一五三七)二月、若冠十六歳にして京都で朝会を開き、当代の有名な数寄者、松屋久政を招いているから、幼少の頃から茶道に親しみ、若年にしてすでに夙くその天才的萌芽を示したものの、と言えよう。

始め能阿弥の茶系、東山流の茶人北向道陳に学び、書院、台子の茶事を習ったが、後にその紹介によって、珠光派の武野紹鷗(一五〇二—一五五五)に師事した。

紹鷗は本名仲村、甲斐の武田氏の支系、若狭守護、武田氏の出であり、父信久が諸国流浪の末、堺において皮

革業を営み、武田下野の意において、武野と改姓した。

仲村は天文元年（一五二二）、三十一歳にして剃髪して紹鷗と号し、同八年、三十八歳にして嗣家し、翌九年、千与四郎の師となった。時に与四郎、若冠十有九歳である。

与四郎の入門に際し、紹鷗は日時を定めて口切の茶会に招いたところ、与四郎は四日間の猶予を乞い、大徳寺の笑嶺宗訢しゅうりきんに就て得度剃髪し、口切の当日は僧形で参会、その茶道熱心の覚悟の程を示した、と伝えられている。その「宗易」の名は、宗訢によって、その「宗」字を授けられての命名であるので、これは「しゅうえき」と訓むべきものと私は考える。

入門後五年目、天文十三年（一五四四）、二十三歳の宗易は、堺において茶会を開き、松屋久政を招いているのを始めとして、その後師の紹鷗はもちろん、松屋・堺衆などを客として、連年茶会を催しているから、その天文十三年には、宗易はすでに紹鷗から茶道の奥儀を許され、堺に帰って、斯道に専念していたものと思われる。

天正三年（一五七五）五十四歳以前に、堺衆の先輩、今井宗久・津田宗及とともに、織田信長の茶頭となってい

るが、信長の死後、天正十一年（一五八三）、六十二歳にして、秀吉の茶頭となった。

そして、同十三年七月、秀吉の関白叙任に際し、禁中における秀吉の、正親町天皇への献茶の茶会に参内して、その後見を勤めることとなったので、居士号が必要となり、大徳寺の古溪宗陳の撰によるところの「利休」号の下賜を願い出で、これを勅賜せられた。

その「利休」号は、彼の別号であるところの「拋筌たうせん」（その家業たる魚商を抛棄するの意）とほぼ同意であるうとの意味において「名利頓休」または「名利共休」の意と解せられるのが一般であるが、宗訢しゅうりきんの法嗣、春屋宗園の「利休号頌」の小偈の初句に、「参得宗門ス、利休」とある。この語があり、その「利休」とは、禪門における頗る高いところの悟道の境地を喻示するものとせられるので、私は「利休」とは「利休」として、と考える。

その後、利休は愈々秀吉に親近、信愛せられ、天文十四年頃までには、秀吉の実弟、秀長（当時宰相）と並んで、「内々之儀者宗易、公儀之事者宰相存候」（大友宗麟、家老宛書翰）とまで言われるほど、重用せられたのであった。

けれども、物極まれば、すなわち転ずる。

天正十九年（一五九一）二月十三日、利休は秀吉から堺への蟄居を下命せられ、同二十五日、蟄山原因とせられる大徳寺山門楼上の利休木像は、聚楽第前の戻橋々畔に磔刑せられるとともに、同二十八日には大名並みの切腹を下命せられ、大徳寺門前の自宅において、従容、死に就いたのであった。

二、利休の茶道・佗び

茶道は、禅林における日常茶飯の規定である「百丈清規」（唐百丈禪師著）およびこれに倣った道元の「永平清規」に淵源するもの、とせられる。

嘉暦元年（一二三六）南宋渡来の禅僧、清拙正澄は、執権高時に迎えられて、鎌倉の建長寺に入り、次で京都南禅寺に出世したが、小笠原貞宗に招かれて信州に開善寺を創建し、ここで「百丈清規」の講説を行なった。

貞宗は深くこれに傾倒し、清拙からその中の「布薩式」の伝受を受け、この礼法を基としてし武家の日常茶飯の礼法たる「小笠原流」を考案した。この武家礼法によっ

て、茶道における礼法を創始したのが、六代將軍義教（在位一四二九—一四四一）の同朋衆たる能阿弥（生歿年不明）であり、この能阿弥のいわゆる「東山流」茶道に学んで、遂にこれに超え、逆に能阿弥の師となって「奈良流」茶道を創始し、將軍義政の茶道師範となり、紹鷗・利休と正伝せしめたのが、珠光（一四四三—一五二二）である。茶道が「茶禅一味」を称せられるのは、それが本来、禅林の日常茶飯の規定に由来するものであるからであるが、右の能阿弥の義政への推薦の語に、

コノゴロ南都称明寺ニ、珠光ト申モノ御座候。此道に志深ク、三十歳以来、茶ノ湯ニ身ヲ抛チ、又ハ孔子ノ道ヲモ学ビタルモノニテ候。（山上宗二記）

とあり、茶道が、禅林即仏教の他に、儒教をも採入していることは、同じ「山上宗二記」に、

一 御茶湯者朝夕唱語、一志、二堪忍、三器

とあるによっても明らかである。

孔子が「吾十有五而志_レ学」して以後、而立・不惑・知命・耳順・不惑_レ矩を経て、なお「吾不_レ能_レ已矣」（中庸）であったのは、古来有名であって、その不撓不屈の志操の堅固さは衆知のことであり、これを正に右の「一志」

にピッタリであるし、また彼が弟子たちの質問に答えて「克己復礼」と言い、また「其恕乎。已所不欲、勿施於人」と言っているのは、その「克己」も、「恕」も、ともに右の「二堪忍」のシノニムに他ならない。

茶道が、「茶禅一味」であって、仏教哲学を正伝するとともに、また儒教哲学における、共同社会「二人」「从」「仁」のイデーするところの、「克己」「恕」の当為をも正継していたことは、ほぼ疑いがない。

しかしながら、利休の祖村田珠光は、仏教・儒教両哲学に依拠しつつ、同時にわが国古来の美的理念として、和歌・能・生花などを通じてイデーせられていたところの、「侘び」理念を採用し、いわゆる「侘び茶」としての、その自身の茶道を樹立したのであり、これを一層徹底して、大成したのが利休なのである。

その「侘び」理念は、従来これを国語学的・語源学的に明らかにした人を私は知らないが、そのシステムが「わ」であることは疑いなく、この「わ」の語源を明らかにすることによって、私はほぼその語源的語義を明らかにし得た、と確信する。（辞書——「大言海」「広辞苑」によれば、それは、長い物を曲げて、丸くしたものとある。）——そ

うするとその動詞は、「わぶ」となるが、現に「詫ぶ」と宛てられたケースにおいては、その人体自身が、「長い物を曲げて丸くし」たところの形（以後、「鬱屈の姿勢」という）を採っているではないか。

そして「長い物を曲げて丸くし」ようとする、途中で「割れ」たり「折れ」たりするので「わる」（そのワリ音変が「をる」）の語が、そして割折すると二、三に分れるので、「わく」（分）の語が派生せられ、またこの派生語に「為る」動詞の「し」または「手」（音変「だ」が接頭せられて「しわる」（挽）「しをる」（挽・枝折・萎）「たをる」「しわく」などの語が派生せられたのである。

却説。その「詫ぶ」のケースが典型的であるが、私たちが、私たち自身の肉体を鬱屈させて、「わ」（輪・環）形を取らざるを得なくなるのは、私たちが社会的・経済的乃至政治的にギリギリの状態にまで追いつめられて、そういう肉体的な「鬱屈姿勢」を所働せられたからである。そして、上古、物質的には貧困であり、専制的な権力が横行した時代においては、これまた「お詫び」のケースがティピカルであるように、一般庶民がそのような肉体的な「鬱屈姿勢」を取らざるを得ないケースは極め

て多く、彼らは居常、自他のそのような姿勢を見聞していたに違いない。

そして実にそこに「わぶ」の「極限」概念が派生せられ、夙く平安朝以降、この語はその派生的語義において使用せられるに至った。「思ひわぶ」「恋ひ佗ぶ」「住みわぶ」などの語がそれであって、それは明らかに「思ふ」「恋ふ」「住む」の極限を示しているし、またその際、彼らがその正常姿勢を維持し得ずして、そこにその肉体的な「鬱屈姿勢」を取らざるを得なかったであろうことも、尤に推し得る所である。

故に、利休・芭蕉らの当代においては、「わび」は、ハッキリと「極限」概念として理解されていたのであって、芭蕉伝書における、

佗と云は至極也。理に尽たる物也と云。

(服部土芳「三冊子」「くろさうし」)

の一語は、尤にそれを立証するであろう。

この「わぶ」(連用形名詞は「わび」)を「詫」「佗」と書き分けているのは、明らかに宛て字であって、漢字辞典によれば、両字とも、「ほこる」(誇)「あざむく」(誑)がその語義であって、現在、私どもがこの両字を以て意

図しているような語意は、一向にない。

然るにこの人偏「佗」字に「僚」(とどまる、止)字を合して、「佗僚」という熟語とすると、これは、「望(又は志)を失なう貌」とあって、「大言海」ではこれを、そのわぶの項において、左の様に註している。

離騷、注。佗、立也。僚、住也。言憂思失意、住立而不能前也。

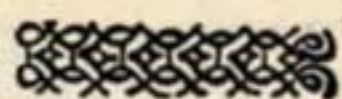
すなわち、当代において、「わぶ」の語にこの両字を宛てた者は、この両字を、「佗僚」の語義と取り違えて、匆卒にこれを、「望または志を失なった」ような、窮迫・失意の状態を示すものとし、その「詫」の場合においては、陳弁、これ努めるケースが多いので、これを他の場合と特に区別して、言偏の字を以て宛てたものであるう。

「わび」(以下「佗び」)が「極限」概念であることは疑いない。それでは、珠光、紹鷗によった利休は、一体、如何なる意図を以て、この語を自身の茶道における理念として採用したのであるうか。

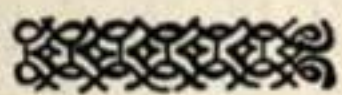
章を改めよう。

(つづく)

浄土句集



一田牛畝選



色違え千両万両簀柑子

福岡 筑場 不遠

働かせもらえらからだ喜寿の春

東京 阪入 等達

大根を畝にころがし抜きつづく

神奈川 松本せつよ

遠くより鐘の響きや春近し

埼玉 佐藤 泰子

臘梅のかすかに匂ふ^{あした}かな

東京 鳥居 千代

万両の紅にかかれる埃かな

東京 星野 小登

七草粥一人すすりて俵に

千葉 菅 ます

うぐいすの高音ききつつ目覚め

枝垂れ咲く総本山の御忌桜 一田 牛畝

福岡 原 敬二郎

悲しみの歎きさまぐ／＼涅槃像

福岡 高良 慈風

福岡 荒牧 還愚

悴みて割笏落す不覚にも

東京 新井 新生

桜田の濠の日溜り浮寝鳥

東京 鈴木 葉子

節分の舞台整ひ鬼を待つ

東京 真野 よし

凍雲に夜泣屋台の遠さかる

東京 猪瀬 幸子

枇杷の花住む人絶えし古館

京都 安藤 寛

除夜に撞く鐘を下見の僧親子

東京 栗原やえ子

夫逝きて妻の座裏し去年今年

評 夫在りし日は何事も夫任せで、夫唱婦

随でよかったが、その夫亡きあとの責任の重きこと、それが年末年始ともなれば更にまた。

ふるさと紀行

＝西曉寺什物＝

刺繡曼荼羅縁起について



あさひ
旭

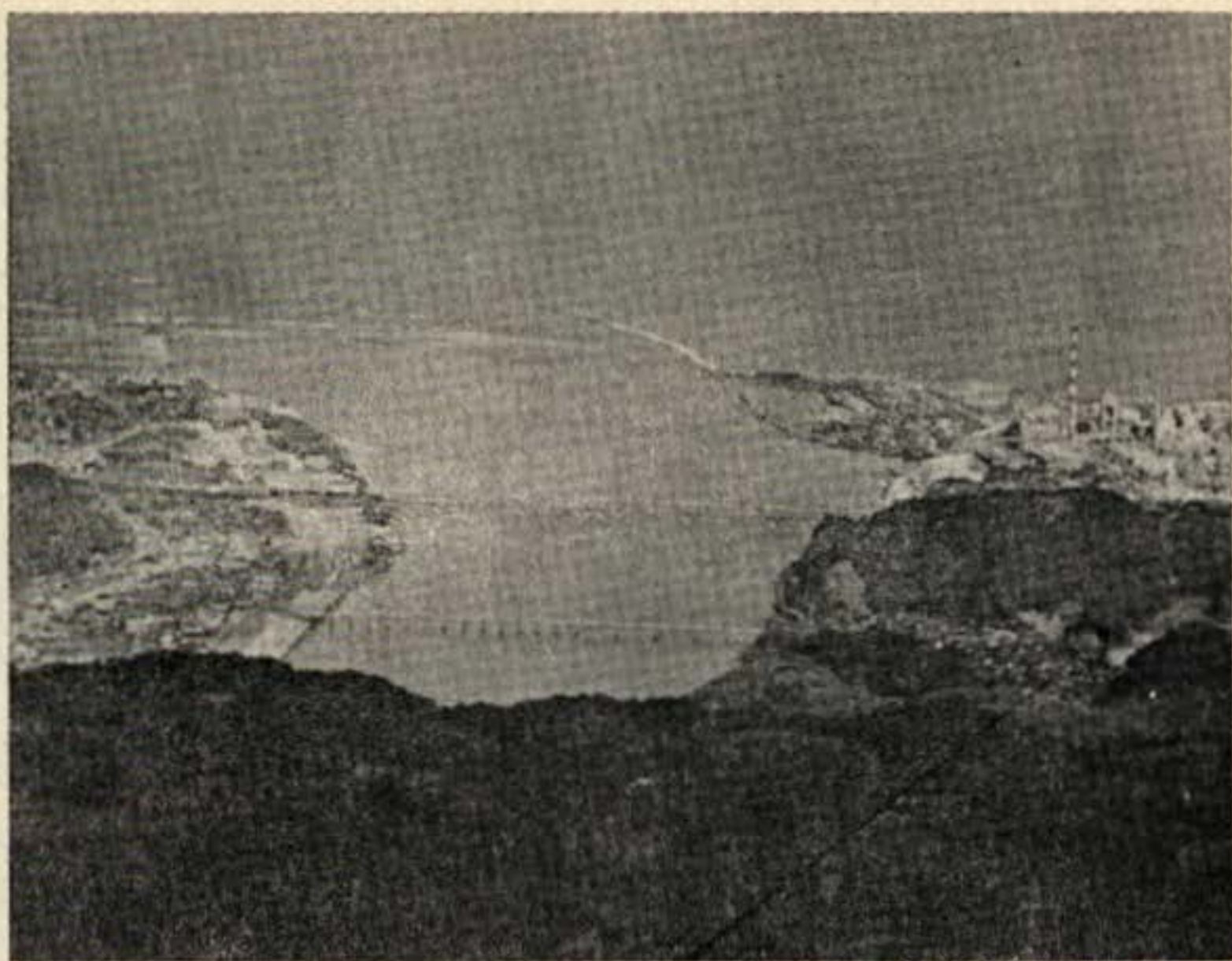
しゅん しょう
俊 正

(江津市西曉寺住職)

○
かつて、「この「まんだらさま」のお供をして、山口から九州方面を巡教して廻ったものです」と話して居られた法類の甲斐老師も、遷化されてからもう七年にもなる。師匠の私の祖父、敬誉行俊の曼荼羅講説の前座をとめて、この曼荼羅の作られた縁起を語るのが役目でした、と――やがて桜の花のつぼむ頃、恒例の寺宝曼荼羅開帳の彼岸中日を迎えますので、その縁起に因んだお話をしてみます。

石見といえは三祖良忠上人の生誕地として知れるぐらいで、誌友の関心も薄いところと思いますが、公害列島といわれるなかでは、汚染度の少い地方には違いありません。東京の孫達が夏休みに入ると毎年のようにやってきます。何故こんな田舎へ来たいんだ、と問えば、美味しい空気が吸えるから、と小学二年の子供までが云うんです。親から聞きかじった言葉でしょうが、ユニークな過疎の表現ではあります。

観光診断の達人でもある奈良本辰也という先生が、斯う語って居られます。「出雲まではどことなく関西の雰



江津市江ノ川河口

田舎がある。しかし、石見路に入ると少し趣きが違う。言葉も違うし、人々の気質も異なるようだ。出雲地方の人が、どちらかといえば意見を差しひかえるところを、石見地方の人々は意志をはっきりとする。同じ島根県であつても違った風土を感じる」と、成程と思われるふしがあります。

山陰地方を鉄道旅行された方は、石見路に入ると、平野の少い岩壁の合間から日本海の見え隠れする景観や、山漁村の集落の赤瓦の屋根が、特に印象に残ったことと思います。今は国道幹線の貫通で、車のラッシュは何処も同じ騒音と塵風を送ってはくれますが、暫く足を止めて休息の場を訪ねられるならば、其処に、風土に根づいた、素朴と清純の風情を味覚されることと思います。

さて序語はそれくらいにして早速、「まんだらさま」の寺なる私の町にご案内します。——中国一の江ノ川が日本海へ注ぐところ、「川」といって湯と緑の工都を市標に人口三万の江津市があります。都会の郊外と変らぬ工場や商店街の新開地と、屏風一つ隔てて、昔ながらの煤けた白壁や、赤茶けた土塀の残る旧町があり、これが元の本町で、その中復に浄土宗旭榮山西曉寺があります。

寺の縁側に立って、南の方を望めば、高角山が直ぐそこに見えます。此処は昔、万葉の歌人柿本人麿が「石見のや高角山たかつのの木の間より我が振る袖を妹見つらむか」と詠んだ史跡がありまして、好適なハイキング・コースです。この山に登って江ノ川の古代より連綿として続く悠久の流れを見下し、青くひらける日本海を展望する時、この川と港で開けた、わが「ふるさと」の歴史の重さと偉大な先人の姿がしのばれます。

○

お彼岸ともなりますれば、近くの真言宗の寺では地獄の絵図が本堂一ぱいに掛り、浄土の方は寺宝の極楽の変相が開帳（イチ）されるといので、両寺のあいだから境内にわたって彼岸市がたち、それを往き交う人波で、昔は随分賑ったものでした。今は往時のおもかげはありませんが、それでも彼岸といえは「まんだらさま」と、巷間根強い風土の余韻は残っております。

それでは縁起話に入る前に、その実物の概要を申し上げておきます。それは文政年間の作品で、五色の絹糸で縫われた観経曼茶羅であります。縦一丈、横六尺の大幅

掛軸になっております。今から百五十年前の刺繍作品という稀少価値を、全国の門信に問いたいと、かねてより考えていたことでありましたが、いま、機縁をいただいで、陳述いたします。

寺の創立は寛永年間、一宗の大徳以八上人を開基といたします。歴代のうち第十一世鏡譽達玄和尚は当寺中興上人であり、また浄業専念の清僧と伝えられて居ります。この上人が中将姫の作と伝わる有名な大和の当麻曼茶羅に、殊のほか欽慕傾倒されていたということで、当寺に曼茶羅の安置を常に願われていたところから、悲願成就を本尊如来に祈念され、不断念仏を修せられまして幾百日か経った或る日のこと、偶然にも一人の尼僧とその従者風の旅人が来寺し、尼僧の云われるのに、自分は縫いをする者だが何か縫わせていただけまいか、自分の生きているうちに縫って残して置きたいものだが、と云われる。また伴侶の男は、なにか不思議な導きに誘われるが如くこの里をおとづれ、足に曳かれて知らぬまに山門に入ってきたが、一夜の宿なりとお願い致し度い、などと申された由よし。上人は観経曼茶羅の招致が畢生の念願でありましたので、縫師の到来は願ったりかなったりと

いうところで、それにしても不思議なこともあるものだ、これぞ如来の御指示とばかりに欣ばれて、早速、飛脚を京都に遣^{つか}して絹糸を買い需め、半歳の精魂込めた作

業で、鮮かな刺繡の曼荼羅の現出と相成った次第でありました。

これを縫われた旅人の、その後の消息行方などが不明



刺繡曼荼羅縁起（文政七・八年作）—西暁寺什物



（拡大接近図）

なところから、仏菩薩のお使いであつたとかなどと、人々の間では付会^{あいだ}の説も流れ伝わったことでした。又、私考ですが、これ程の技能者なれば、他にもその作品が残されてあるべきものと思われませんが、他宗寺院はいざ知らず、同宗門内にて今日まで、私の無学魯鈍^{ろとん}の故か、そのことあるを聞きません。作者の住所氏名及び年代等が後記のとおり明かでありますので、その作者の消息や、作品の現存を御認知の方に、御教示賜わらばまことに幸甚と存じま

す。

ともあれ、旅する異境の縫人が、辺境石見の貧坊の一住持の悲願に巡り遭い、邂逅の縁を、疑心を離れて委せ願いつ、電灯も物資も無い文政年間に、大作を成満された御事蹟に対しまして、深い畏敬の念と御縁の有難さを、しみじみと感ずるものであります。

この刺繡の曼茶羅様が、爾来、幾万人の人々に拝まれ、善男善女の心に欣求浄土の願いを喚びさまし、時代の人の魂を救われたことか、——嘗^かつて、この曼茶羅様の他国へ出開帳のときは、門外に出られては、開筵の寺から寺へと、常に善男善女の肩車にて、念仏の声と共に、リレー送りされて回られたものと、随伴された故老師の実話でございますが、これも、車も電灯も無かった頃の語り草です。

○

時代は移り今日、曼茶羅様も信仰の対象としてよりは文化財となり、曼茶羅信仰の人も殆んど居なくなつたことも宜^よなる哉でありますが、せめて什宝を守る住持たるもの、年二回の開帳の日、宝前に三伏九拜して仏恩報謝

し、先人の御功績を讀みたいものと存じ、虔んで紀行文の御用命に添えて、縁起話の披露をさせていただきました次第です。

〔後記〕

なお備考として、曼茶羅の両側に刺繡されてあります文字は左記の通りです。

（左側）

南無阿弥陀仏信施檀越先祖前亡後滅之諸精霊等又願法俗両縁之諸霊魂等同証仏果及三界万霊一切有情等皆得解脱旭栄山西曉寺再中興十一世鏡誉代

（右側）

伊予国伊深浦法遍寺秀等法印弟子貞寿尼縫寄進越後州律張産芸州豊田郡大寄嶋妙光山阿弥陀禅玄明弟子本光俱文政七甲申年從八月同八酉至二月造立之

随 想



春の花々

— 思うがままに —

井上信光

(作家)

梅が香にのつと日の出る山路かな
八重梅や尼の手向くる母の墓

芭蕉
其角

枯木かと思間違える古木の梅が、見事な花をつけた。
ほかの木々が、まだ固い芽をつけているのに、春を告げる一番手として咲いたのだ。

この花は、未だ余寒が厳しい折に咲くため、実に強い花である。一度咲けば、雨に打たれても、寒風にさらされても仲々散ることがない。待ち遠しい春を告げる先駆けとしての役を荷なっているためだろうか。

この梅花も、日中の淡い温もりを持った目指しには弱いらしい。一輪、また一輪と散りゆき、大きくふくらんだ新芽と、この役目を交代していく。

この頃になると、庭先の動きが活発となってくる。

春が来たのだ。百花繚乱、樹花も草花も咲き競い合う陽春の季、まさに到来となる。

この先兵は沈丁花だ。

匂いが強すぎると嫌う人もいるが、私は、墨絵に似た冬景色から、一変して活動的な陽気な春のおとづれを知ることができ、この匂いが好きだ。我家の沈丁花はと、庭先に目を移す。すでに散りきった梅の樹下で咲き始めていた。

障子を開ける。冷やかな外気にのって、ふくいくとした薫りが室内にただよってきた。思う存分吸いこむ。なんともいいない薫りである。あの小さな花の、どこにこれだけの薫りを放つものがあるのだろうか。不思議で

ならない。

だが、そんなことを詮索するのはよそう。せっかくの薫りが味気ないものになってしまふだろう。

そして、春の花のエベントは、なんといつても国歌でもある桜だ。三月二十日過ぎ、高知県に上陸した桜前線は、毎時二十キロの速さで、平野部から山間部へ、春を告げながら北上して行く。

一輪を見る限りにおいては、端正に咲く梅花に劣るところはあつても、枝先にまでいっばいに咲く桜は、実に華やかで、うきうきとした気分になせられる。

大盃落花も共に呑み干しぬ

鳴雪

花に風かろく来て吹け酒の泡

嵐雪

知り人の妻をよそ眼の桜かな

紅緑

落語「長屋の花見」ではないが、古来よりお花見と酒は付き物である。花吹雪舞う下での一杯は、仲々おつなもの、飲まぬ人として観桜の折々に、見知らぬ酔人の陽気なさまに、思わずふき出したりした経験をお持ちのことと思う。

しかし、度を越してはなんにもならない。この頃になると、開放感に酔いしれ、浮れ気分のままに、平生では思いもよらぬ言動に走ることがよくある。謝ってすむこととであればまだよいが、取り返しのない過ちを犯すことにでもなれば、花見気分どころではなからう。やがて散りゆく桜花の、あのはかなさに思いを馳せ、自重が肝心である。

こんな時、花御堂に、小さいながらも悠然と立つ誕生仏が脳裏に浮んでくる。

灌仏や裸百貫男の子

馬山

お釈迦様の尻まで青き甘茶かな

子規

田舎に生れ育った私の、遊びのホームグラウンドは、菩提寺の境内であつた。その寺に同級生がおり、彼と暗くなるまで、よく遊んだものだ。そして、ついつい遊びに夢中になり、境内をよごしたり、生垣根をこわしたりして、しばしばご住職にしかられた。

だが、四月七日だけは別であつた。花御堂を飾る花集めを手伝ったからである。

桜、椿、海棠、水仙、金仙花、菜の花など、手に入る春の花を集めに奔走する。一定の量が集まると、いよいよ覆きだすことになる。

段々に作られている花御堂の四面の屋根を、集めた花に水糊をつけて覆きあげるのだ。色合いを考え、花の種類をまぜながら覆くのは、狭い面積とはいえ、大変な作業である。ご住職が二面、私と友人が一面ずつ覆くのであるが、それは真剣である。何故なら、出来あがった四面のうち、一番出来の良い面が正面となるからだ。小学校三年の春、初めて一面を任されたが、私の覆いた面が正面となったのは四年目、六年生の時であった。この時の感激は、今でも忘れることができないほど、強烈なものであった。そして、甘茶の試飲。子供心には、これが目的であったかも知れないが、一年に一度の、あの甘苦い味も忘れることができない。

翌八日、学校の始業式もそこそこに、菩提寺に駆けつける。花御堂は本堂の正面に飾られてある。昨日、自分が覆いた面は、今年はどこを向いているだろうか。だが、近寄りがたいものとなっていた。確かに我が手で覆いたのではあるが、そこには、なにか神々しいものが感じら

れ、触れることさえできなかった。一瞬たじろぐ。

眼を下にそらしてみた。そこには、手を精一杯天地に伸した誕生仏が、微笑の面影で立っていた。救われる思いがしたことはいうまでもない。丸桶を風呂桶がわり、甘茶をお湯がわりに、ひと風呂浴びているかのように、なんともうらやましい姿だ。その健康そのもののお姿にあやかりたいと、用意された小さな杓で甘茶を汲み、誕生仏の頂からそそぎこむ。これで一年の健康はまちがいない。そんな思いがした。今でもなつかしい、春一番の行事であった。

時は移り、あれだけ咲き誇った春の花々も散り、やがて新緑が、その色を一層増す季節を迎える。

こうした自然界の営みは、まことに確実に繰り返されてゆく。それは、あたかも私たち人間どもの、怠け心をいましめ、努力することを教えているかのような確実な歩みだ。

この確実な歩みを、なんとしても我がものにしたい。毎年、そう思うのではあるが、仲々できない。これが人間というものか。春の花は毎年変らず咲くというのに。

読者の便り



ある死亡通知

よしだゆうのすけ
吉田勇之助

数冊の随筆集を単行本として自費出版をされたり、いろいろの雑誌にも随筆を書かれた方と、亡くなられるまでの極めて短い期間ではあったが、よくお話を交えたことがあった。その方は当時、七十歳ぐらいであったと思う。ある会社の社長をやめた後、その相談役になられ、お好きな執筆に打ち込んでおられた。そして、屢々その寄稿誌をお送り下さった。いただいた雑誌の中の随筆を読んでいて、

「生前一方ならぬご厚誼を頂きまして深くおん礼申し上げると俱に皆様のご健康並びにお家の弥栄えを祈念

仕ります。草葉の陰より謹言敬白」としてこの通信文を以てすべての行事に代えて見たい決意にあります

という箇処に至った時、わたしも亦同じような考えをもっておったのでおどろいてしまった。

わたしが早稲田の学生であった頃、よくお話を聞いたYという牧師さんがおられた。

その方が亡くなられた時、変った死亡通知をいただいたことがある。文章は殆んど記憶していないが、通知状の形式は型破りのものであった。結婚通知に用いる金縁のカードに、「……主のみもとに赴く……」という極め

て希望に満ちた明るい内容の挨拶文が印刷されてあったのが今もって、はっきり印象に残っている。受けとった当時は学生であつたのでそれ程深い感銘はなかった。

死の足音を身近かに聞いている一九〇〇年生れのわたしは、この牧師さんの死亡通知の中の言葉が改めて憶い起されてきたのである。敬虔なY牧師さんに対しては頭の下がる思いがしてならない。あの嫌らしい黒棒の通知状が自分の死を友人、知人に知らせたくないとは考えているが、Y牧師さんのように信と喜びに満ちた通知を用意できるであらうか。

わたしはここに一つの場面を仮想してみた。「手術がうまくいっても生命はあと六カ月ぐらい……」と医師が話している言葉を不図耳にしたらどうであらう。おそらく、わたしはその瞬間から惨めな精神状態、虚無感、絶望感におちいってしまうであろうことは確かだ。

帰り赴く世界を信によってつかむ体験を深めていく以外に生への限らない執着、死に対する強い恐怖をのり越える道はないのではなからうか。

(こ)(は)(な)(し)

しつぽりと濡れるとは

「七歩と濡れるとは何事ぞ」——、七歩は「しつぽ」と読んで、しつぽりという意味のあて字である。しつぽりと濡れるとはどういうことであるかというと、

されば釈迦誕生の時、阿難陀竜王は湯を吐き、難陀竜王は水を吐き、この産湯にぬれながら、七歩を行ぜられしより起りたることばぞかし。浄土の無量寿経に、從右脇生現行七歩といへり。(角川文庫本『醒睡笑』上巻、二二ページ)

という説明があり、釈尊がご誕生の折、最初に七歩歩いて「天上天下唯我独尊」と発せられた教えをもじってこじつけている。「しとど濡るるも、七歩となり」とは、まことにものごとの由来はどうともいえるもので、そのこじつけ方がおもしろい。

これも安楽庵策伝の『醒睡笑』のこぼれ話であるが、釈尊ご降誕の模様を伝える経文の尊い伝承を、無信仰的にいささか皮肉ったおそれおおい一くだりでもある。(H)

ハガキ通信再録

檀信徒のみなさま方と市の区画整理課の方々との絶大なる御協力のもと、お墓の区画整理の準備が順調に進められておりますことは御同慶に存じます。区画位置については近く御連絡します。法令により静岡新聞、毎日新聞に三回づつ静岡市長名で改葬広告が出ました。お申し出のない方は無縁として処理されますのでお知らせの方方は御連絡下さい。

幸せは いつも三月 花のころ

女房一九で わしゃ はたち(二十歳)

死なぬ子 三人 親孝行

使ってへらぬ 金百両

死んでも命のあるように

江戸時代に唱われた歌ということです。

人間の慾というものは限りありません。幸せを願うの

も、いつの時代でも変わりありません。もうすぐ春のお彼岸です。私達の理想の世界、それが彼岸であり、それに達する様にお互いが努力いたしましょう。

それには、お墓まいりをして、

- (一) 布施(ほどこしあい)
- (二) 持戒(きまりをまもる)
- (三) 忍辱(しのびあい)
- (四) 精進(努力する)
- (五) 禅定(心を定める)
- (六) 智慧(仏の智慧をつける)

というこの六つを守れることを誓うのが彼岸に到達するところができる道ということでもあります。

お互い合掌し合い一つとなつてすすみましょう。

——南無阿弥陀仏——

——静岡市西福寺(川村悠穂住職)・「ハガキ通信」一

三号(昭和五十三年三月一日付)より

◎この欄へのお便りをお待ちいたします。

念佛ひじり三國志

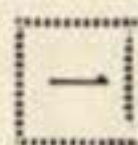
(四六)



一法然をめぐる人々

寺内大吉

挿絵 松濤達文画



佐々木高綱は木曾義仲を攻めた折、宇治川の渡河作戦

で見事一番乗りをした武将である。愛馬「生月」を駆つて、梶原源太と先陣争いをした。水中で、源太の馬の腹帯がゆるんでいるのを指摘し、締め直している際に追いついた、という逸話までが語り伝えられたほどの有名人である。

佐々木一族は、源頼朝が伊豆で旗上げした当初からこ

れに従った。平氏の判官山木兼隆の館を襲撃したときは、定綱、経高、盛綱、高綱の佐々木四兄弟は抜群の働きをした。

末弟の四郎高綱は石橋山の合戦で最後まで頼朝の身辺にいた。この合戦は惨敗で山中を逃げまわったわけだが、組織的な抵抗をやめ、各自めいめいが落ちのびることに決まると、頼朝は佐々木高綱に言った。

「よくぞこれまで私を見捨てずについてきてくれた。不幸にも今日は敗戦だったが、必ず再起して平家の天下を

くつがえす。天下を取った暁には、おぬしに日本国の半分を与えるであらう」

おのれ一身を守るのさえ危険なさなか、頼朝は必ず天下を取る、と断言したのだ。彼の覇気が尋常なものではなかったことが判るであらう。

果たせるかな頼朝は天下を平定し、將軍の座に就いた。ではお約束の日本国半分を、と佐々木高綱が請求したかどうか。史家のなかには高綱の出家を、この約束違反にこじつける人もいるが、常識から考えてあり得ない話だ。かりに高綱が、宇治川先陣の戦功をおこったとしても佐々木一族の舎弟である身が日本国の半分を領しようなどとは思ひも及ばなかったであらう。

また頼朝は、戦後になって佐々木一族をそれ相応に好遇したのである。平治の乱以前に領していた近江領を復させたばかりか、西国の旧平家領を六国もこれに添えてやった。

不満をいさぐ道理はない。

佐々木高綱の出家は、やはり建久二年初頭、近江領でおこった叡山との争騒による佐々木一族の没落が動機であらう。

前号のあらすじ

高階栄子との船中での情事。明遍は不邪淫戒を犯している。僧都という僧階に叙せられながらも、やはり一個の人間であった。明遍が起居する庵室は光堂と名づけられている。その由来は快慶作の無仏格の内持仏を得てからだと言われる。奇しくもこの時、明遍も仏師快慶も自己の確固とした信仰を持つていなかったのである。後年、明遍が空阿弥陀仏と号して念仏者となったことや、快慶が晩年に阿弥陀仏像だけを刻んだということは興味深い。

ところで、空阿弥陀仏と号する念仏者には、この明遍のほかにもう一人いた。三位中将重衡の遺児捨丸の傍らを片時も離れず護衛の任にあたっていた馬粥こと豊田長門である。今は空阿弥陀仏と号して、法然上人の教えを自分なりに咀嚼し、仏像を焼き払いながら説法していた。

高綱の長兄太郎定綱は旧領の近江に復し、これを治政していたが、長いブランクの間に比叡山が私有し、領民は年貢をどちらへ納付すべきか迷っていた。

叡山側は千僧供養をした折朝廷から拝領したと主張するし、佐々木側には鎌倉將軍のお墨付きがあった。

年貢米の収奪で小ぜり合いをくり返しているうちに、定綱の長男小太郎定重が、日枝神社の宮仕法師を斬り捨てたのである。日吉神社の神人どもが神鏡をかかげて定

綱の邸宅へ乱入し城壁などを破壊、留守居の女を凌辱したことに意趣返しであった。

定重は宮仕の法師を斬ったばかりか、神鏡まで叩きこわした。

叡山の衆徒らはこの暴状に怒り、京都の朝廷へ強訴に及んだ。さらに佐々木父子（定綱、定重）の身柄を叡山へ寄越せと鎌倉へ強談判だ。彼らの背後で、鎌倉における土地問題の長官である梶原平三景時が佐々木一族の足を引っばった、と「吾妻鏡」は憶断している。梶原には宇治川先陣における怨恨もあったであろうが、梶原は平家討伐時に生死を共にした旧鎌倉武者に意地悪をする習癖があった。熊谷直実の場合も同じで、戦後に高級官僚となった者と武人のままでいる者との深い溝であろう。

この梶原の入れ智恵をバックに、京都方の佐々木一族への追究は辛煉だった。將軍頼朝の愛情も無力となり、建久二年五月、ついに佐々木一族へ断罪が下った。

当の犯人小太郎定重はいったん対馬へ流されることに決まったが、それを手ぬるしとして追訴され、梟首。父定綱は薩摩へ、次男広綱は隠岐へ、三男定高は土佐へ、いずれも流罪となった。

当然、所領は没収である。

惣家の定綱一族はこうして断罪を受けたが、高綱ら舎弟たちには累が及ばなかった。現に次兄の盛綱などは断罪の直後も將軍頼朝が新亭へ移住した祝宴に梶原景時らと同座して酒盃をあげた記事が「吾妻鏡」にはある。

だが、四郎高綱の名はそのころ頼朝の身辺からぱったりかき消える。

熊谷直実同様に、梶原景時がいる武家社会にとどまることをいさぎよしとはしなかったのであろう。

佐々木高綱が出家入道して高野山の蓮華谷へこもったのはまぎれもないことで、その蓮華三昧院は高綱の建立になるもので、後年これを明遍にゆずった事実が明記されている。

しかし高綱が念仏ひじりとなったのは、明遍の指導というよりも俊乗房重源の手になったと推量するのが自然であろう。法然伝（「四十八巻伝」）にも東大寺復興の勧進で、高綱が瀬戸内海の海中にあった巨柱を資材として献じたという記載がある。この巨柱は牛百二十頭で索引ほるほどの材だったそうだ。

ところで、これまでしばしば紹介した高野山の別所蓮

＜廬山小景＞



華谷だが、これは中国廬山における白蓮社を模したものと言われる。

白蓮社――

中国の念仏者慧遠（三三四―四一六）が乱世のなかで門弟百二十三人ともども廬山の東林寺に籠居し、念仏三昧にふけた結社活動を指して言う。

中国で編した仏教史「仏祖統紀」はその浄土立教志で始祖としてこの慧遠をあげているほどだ。そして二祖には、阿弥陀仏の化身と称揚して善導大師を列している。

入唐三たびに及んだ俊乗房重源が、廬山の白蓮社を研究し、その日本版を高野山の新別所に結んだに違いない。慧遠は廬山にこもり、時流に超然たる姿勢を保ち続けた。

揚子江一帯を占拠した軍閥桓玄が東晋の征伐軍と決戦をまじえるべく出陣の前夜廬山へ登った。慧遠に面会して、

「自分はこれから天下分け目の決戦に臨もうとしていて、どうかこの戦いに福運がもたらされるように祈って欲しい」

と頼みこんだ。慧遠はいともあっさりと、

「よろしい、祈ってさしさげる。貴將の無事をな」承諾した。

悦んで帰ろうとする桓玄將軍を、慧遠は呼び止めた。「ところでこれから貴將が戦う相手の將軍の名は何と言うのか」

「殷仲堪將軍である」

「殷仲堪か。判った。それならばその殷將軍の無事息災も祈ろう」

桓玄はいぶかしげな表情で廬山を降りていったが、途次側近をかえりみて、

「あの坊主、わしがこれまでに会った最高の人物だ」と、賞讃したそうである。

桓玄はこの一戦で大勝し、中東に覇をとなえかけた。だが新しい脅威が南下しつつあった。天師道教という新興宗教の教主が大軍をひきいて迫ったのである。

桓玄はかねて慧遠の人柄に傾倒していたので使者を廬山へ送った。仏教の危機である。よろしく信者を鼓舞して仏敵撃滅に手を貸して欲しい。わが陣中へ来たれ、と。慧遠の返答は峻烈であった。

「沙門は王者を敬せず」

慧遠の不退転な念仏思想を、俊乗房重源が唐から伝え、蓮華谷の念仏ひじりたちに吹きこんだことはいうまでもない。

二

高野山の念仏ひじり。後年、彼らを「高野聖」と呼んだ。

真言祈禱を専らとした高野聖と念仏ひじりとの間に異和感があるようだが、これはあくまでも後世になってからの紛糾である。江戸期にはいり、宗教統制の処置として「高野聖」はすべて真言宗に帰属すべし、と規制したからである。

この鎌倉期、蓮華谷のひじりたちは純粋な念仏ひじりであった。

そこへ出家遁世した佐々木四郎高綱の姿を「吾妻鏡」はこんな短い描写でうき彫りさせている。

四郎左衛門尉高綱入道(西入) 黒衣、檜笠ヲ着シ、
高野ヨリ来リテ舎兄等ニ謁ス

建仁三年（一一〇三）の十月、高綱は漂然と舎兄佐々木判官定綱の前に現れたのである。

西入は、高綱の念仏ひじり名である。黒衣はそのユニフォームで、安楽や住蓮が公然と着て歩きまわった「禁色」の法衣である。

黒衣がなぜ「禁色」になったのか。

中国では「黒」を政治にかかわる色彩として禁じた。この習慣が日本へも持ちこまれ、僧尼令で厳禁した。後年、徳川政権下で金地院崇伝を「黒衣の宰相」と呼んだのもここから由来する。

禁色の黒衣をあえて着て巷を横行したあたり、念仏ひじりの意慾が洞察出来る。彼らは信仰だけではなく、政治の世界をも念仏一色でおおいつくそうと気おいこんでいたに違いない。

この三年前、鎌倉では將軍頼家が十四名の念仏ひじりを引っ捕らえて、袈裟を剥で焼いた記事が「吾妻鏡」にある。

正治二年五月十二日（前略）比企弥四郎仰セテ承リ
テコレオ相具シ、政所ノ橋ノ辺ニ行キ向イ、袈裟

ヲ剥ギ取りテコレオ焼カル。見ル者堰ノゴトシ。皆彈指セズトイフコトナシ。僧ノ中ニ伊勢称念トイフ者アリ。御使ノ前ニ進ミ申シテ云ワク。俗ノ束帶、僧ノ黒衣、オノオノ同色トシテ用イ来ル所ナリ。ナンゾコレオ禁ゼシメ給フベキヤ、オヨソ当世御政（改）務ノ体ヲ案ズルニ、仏法世法共ニ以テ滅亡ノ期ト言イツベシ。称念が衣ニオイテハ更ニ焼クベカラズト云々。而ウシテカノ衣ニ至リテソノ火オノズカラ消エテ焼ケズ。即チコレオ取リテ元ノ如ク著シテ逐電ス云々

將軍頼家は念仏名僧等を禁断したが、とりわけ「黒衣を憎んだ」とこの前段でも書いている。

念仏ひじりの黒衣こそ、権力者には目ざわりでたまらなかつたのであろう。

將軍が厳禁した黒衣をわざわざ着こんで、兄佐々木判官定綱の前に現れた四郎高綱である。不退転の念仏者であつたことは、まぎれもない。

一度は薩摩へ流人となつた兄定綱が、この建仁三年には判官となっている。朝廷における検非違使の長官であ

る。なぜ定綱がここへ榮進したかは、あとで詳述する。

高綱入道西入の念仏ぶりだが、法然伝、「四十八巻伝」は興味深い逸話を紹介している。

高綱が京都へ出てきて東山で法然と会った折のことである。彼はこんな質問を發した。

「毎日四万、五万べんと念仏をとなえているのですが、余りやっていると思ふなつて仕方がありません。そんなときはどうしたらよろしいのでしょうか」

法然はもの静かに答えた。

「眠くなつたら、そのまま眠つたらよろしい。そして眼がさめたら、またお念仏をとなえなさい」

自然の生きざまにさからわない教えである。いと尊し、とこれを評したのは「徒然草」の兼好法師であつた。「徒然草」では、問いかけた者を「さる人」としているが、「四十八巻伝」に信をおけば宇治川の先陣、佐々木四郎高綱だつたことになる。

高綱のひじり名「西入」も歴史の推理のうえで見過ごし得ない。

法然が讃岐へ流罪になつた例の建永の法難で、四人の念仏ひじりが処刑されている。安樂と住蓮、性願房、そ

れと善緯房西意であつた。

善緯房西意が、どんな人物であつたかは判らない。

「古徳拾遺絵伝」では、

撰津ニ於テ誅ス。佐々木判官、不知実名ノ沙汰

と注釈している。

この佐々木判官が高綱の甥広綱であることはまぎれない。父定綱は直前の元久二年四月九日に死んで、広綱はあとを襲つて検非違使の長官に任ぜられている。

父定綱にならつて隠岐国へ流されたはずの広綱が、なぜ判官に復活したのであるうか。

「高綱入道は、僧都とは年来の仲。ほんらいならじかに話合われてもよいはずだが、今日屋敷に見えられて是非仲立ちをして欲しいとのことで」

光堂で明遍の帰りを待っていた久我通親はいきなり来意を切り出した。

すでに禁中で飛ぶ鳥を射落す地歩を確保した通親だ。

それがわざわざやってくるとは、よほどだいで火急な用向きであらう。

「何の話かな」

明遍は通親と高綱入道にこもこも視線を移しながら訊いた。

「莊園のことです。摂津の長江倉橋領だが、あれは四天王寺が宰領しておるそうで」

「とんと知りませぬな」

「いや、土地のことはご存じあるまい。しかしわしも入道も、四天王寺とは全く無縁で」

四天王寺の言葉が出るたびに、明遍はうしろめたい感情におそわれた。あそこからの帰路の船中で契った丹後局栄子の肉体が思い出されるからである。

摂津、長江倉橋領（現在の豊中周辺にあたる）は寿永戦役のあと佐々木一族が拝領したもので、四郎高綱が兄弟間の話合いによって割譲された土地だという。ところが建久二年、叡山衆徒との争いで断罪され、知行を召し上げられたあおりをこうむり、高綱の手を離れてしまったのである。四天王寺がこれを寺領とした。

「わたしも出家した身、今更旧所領などを……」
と、高綱が語りはじめる。

土地なぞどうでもよいのだが、兄定綱のやり口が余り

にも非道なので、意地でも取り戻したいというのである。

定綱の非道ぶりとはこうだ。

日吉神社の宮仕法師を斬ったりして、わが子は梟首され、自らも薩摩へ流罪となった定綱は、復活を策して各方面へ奔走した。ようやく掴んだのが一条能保であった。

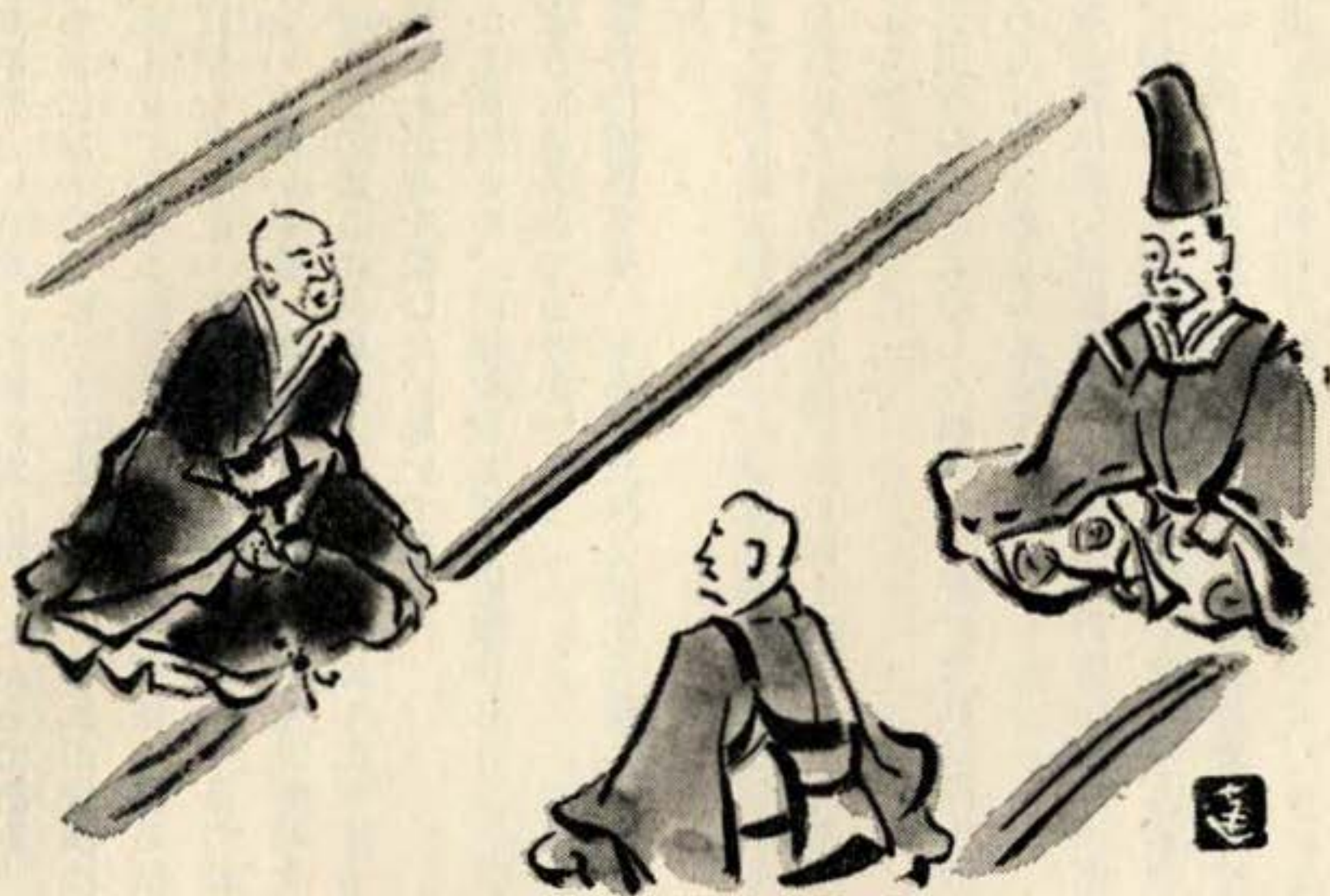
能保は一条家という由緒ある公卿だが、九条関白兼実の公武合体策に乗って、源家頼朝の妹を妻にもらった。おかげで鎌倉の利益代表として検非違使の長官という地位も得た。

佐々木定綱は役に泣きついた。懇願するばかりでなく、ひとつの条件を提示した。それは戦功によって佐々木一族は近江の旧領のほか畿西六カ国を掌中にしたが、弟高綱に分けた領地をそっくり一条能保に割譲するという取引だった。

建久四年、能保は朝廷に強く懇請して定綱父子らの罪を免じ、旧所領を復元させることに成功した。もちろん摂津その他弟たちの所領は自分がもらい受けたのである。

ただし、自分名儀では露骨過ぎるので、四天王寺の寺

<明遍・高綱・通親>



領とした。実質は能保の所有だった。

おのれの領地だけ取り戻せば、弟のものはどうなってもかまわぬ、という身勝手な定綱に四郎高綱も意地になった様子である。

「四天王寺は名儀だけの領主になっている。これは明らかに違法で、僧都、そなたから寺側に」

圧力をかけて欲しい、と久我通親は言う。さらに自分も、朝廷内部からゆさぶりをかけるであろう、と構想を熱っぽく語った。

こんな片々たる土地問題で、通親ともあろう男がなぜこれほど熱っぽくなるのだろうか。と明遍は禁中きつてのやり手の表情を盗み見た。

いったい通親に何の得があるのだろうか。利がなければ動かぬ男だからである。

そうか、と色白な通親の額に、明遍は野望の輝きを感じとった。

ねらいは一条能保であったか。

頼朝の妹嫁ながら現時点で、能保の立場はすこぶる複雑である。その子高保の妻にと頼朝の娘大媛をもらい受けようとしたが、にべなく拒絶されたのだった。大媛に

は後鳥羽帝という至上の婚約者が現れたからである。

落ち目になった者は、とことん叩け。それが貴族社会の掟らしい。いま久我通親は一条能保が実権を握る摂津の長江領を剥ぎ取って追い落しにかかろうとするのだ。

何という醜い社会であろう、と明遍は眼をそむけたくなる。今更のように父信西入道の死のために出家する機縁を得たわが身を悦びたい思いであった。

「しかし高綱どの。旧領を復して、出家ひじりのそなた、どうなさるおつもりか」

「蓮華谷に帰属させ、さらに立派な蓮社と致したい所存です」

高綱入道は眼を輝かせる。武家社会を捨てた彼としては、高野山という結界に真実の仏国土実現を構想しているらしい。

「四天王寺の方、よろしく頼みますぞ。これは浄土寺二位からもくれぐれとのことで」

久我通親は鋭い視線をあててきた。丹後局との肉体関係を、わしはもう知っているぞ、と言いたげでもある。

ひとの弱点を確実に把握して自己目的を推進してゆくあたり、通親は端倪すべからざる男であった。

三

摂津国、長江倉橋の荘園はその後の歴史で重要な役割をになわされる。

明遍の口ききもあったが、通親や丹後局の強引な押しで、いったんは佐々木高綱に復するが、やがて一条家が精力的に巻き返してくる。これは久我通親の不審な急死とも関連を持つ。

巻き返しの主役は、一条能保の子、二位ノ法印尊長と、高綱の兄佐々木定綱であった。兄弟の決定的な確執がここに始まる。

高綱は摂津領を回復すると、その管理をわが子にゆだねる。善綽房西意こそその実子であった。

建永の法難、専修念仏者の断圧、その一翼で摂津領の収奪が画策されたのではなからうか。

安楽、住蓮の処刑は二位ノ法印尊長の沙汰ということであったし、善綽房西意は佐々木判官広綱（定綱）によって課せられる。一条家と佐々木惣家が手を結び、念仏者断圧に名をかりて後鳥羽帝側近の主導権を掌握したのもあった。

叔父の四郎高綱から摂津莊園を奪い返すと、佐々木判官はこれを後鳥羽帝の愛人、白拍子あがり亀菊の直領とした。かつて四天王寺をかくれ簑に使ったのと同じ手口である。

ところで四郎高綱の実子に信綱という若者がいた。彼も後年には念仏ひじりとなって虚仮阿弥陀仏を号した。

この信綱、惣家が定綱以下流人となったため、いったんそこへ養子となって名跡を守った。長男定重（梟首）広綱（隠岐遠流）定高（土佐遠流）の四男となって入籍したものだ。

定綱、広綱父子が一条能保の取りなしで復活すると、当然信綱の立場は宙に浮いた。ことに実兄の西意が彼らの手で殺されたため、怨恨こそいだくが養家への親愛感など微塵もなかった。

信綱は鎌倉北条家へ接近する。北条泰時の妹を妻にむかえた。それを機に、摂津領の復元を北条家に働きかける。泰時の父義時（信綱には舅父）が乗り出してきて摂津領を亀菊から取り上げた。

これが承久の乱、直接の発火点となる。義時はわが子泰時を総大将として、関東の大軍を京都

へ攻めのぼらせる。佐々木信綱がその幕下の将となったことは言うまでもない。

一方、後鳥羽上皇方も二位ノ法印尊長、佐々木判官広綱が中心となり官軍を組織してこれを迎え撃つ。

承久の乱における唯一つの激戦地が奇しくも宇治川の攻防であった。信綱は父四郎高綱の故事そのままに先陣となって対岸に陣した官軍へ斬りこんでゆく。

官軍もよく持ち耐らえたが、鎌倉の後続軍は数を知らず、ついに散乱して敗走する。佐々木広綱は捕らえられて身柄を義弟信綱に預けられた。信綱には一片の情愛もなく、ただちに六条河原でその首を斬り落した。

この広綱に、勢多伽丸という十歳そこそこの実子がい。乱のあと、仁和寺にかくれていたが探がし出され、北条の陣へ引かれてきた。

「こんな童に、何の罪があるうか」

と泰時は一命を許し、身柄を信綱に託した。ところが信綱は即座に少年の首をハネた、と「吾妻鏡」は書く。

「承久記」はニエアンスがいささか異なり、勢多伽丸の助命を請うたのは信綱自身で、少年が許されたら自分は髻（もとどり）を切って出家する、とまで誓う。

しかし幕府としては、將軍の名代となつて京都守護にあつた佐々木判官だ。それが幕府を裏切つて、後鳥羽帝らをそそのかすとは何ごとであるか。その嗣子を生かしておくわけにはゆかぬとし、いったん信綱に預けた身を六条河原で斬つた、としている。

勢多伽、御所ヨリ給イツル朽葉ノ直垂着替テ車ヨリ下り、敷皮ニ移リ、西ニ向イテ手ヲ合セ、念仏百返計り申シ、父ノ為ニ回向シ、我が後生ヲ祈念シツツ首ヲ伸ベテ討タレナリ
〔承久記〕

いづれにしても凄さまじい確執の結末ではある。

佐々木高綱は鎌倉と蓮華谷を往き來する生活をしばらく続けている。黒衣の武將として羽ぶりをきかせていたらしい。「吾妻鏡」は嘉祿元年十二月、將軍頼經が座所を移した祝席に彼の名前を記録している。

だが晩年は出雲に旅立ち、富田という土地の光明寺に住み着いた。ここで一堂を建て自ら刻んだ阿弥陀三尊を安置し、如来院と名づけられ。訪れる者にこの阿弥陀像を拝させ、念仏の功德を説いて安らかな生涯を閉じたと伝

えられる。

宇治川で先陣争いをした梶原源太景季の非業な末路にひき比べ武人としての余生を全うしたことになる。

虚仮阿弥陀仏の信綱も晩年は蓮華谷にひきこもる。高野山にのこる四郎高綱の遺跡は、いづれもこの信綱が記録したものである。

四郎高綱を親鸞の弟子とし、現実に浄土真宗の寺院に佐々木姓が多いが、これは後年の造作で、高綱、信綱が高野山の念仏でひじりであつたことはまぎれもない、と五来重氏は断言している。
（つづく）

◇“浄土句集”欄投稿要項

一、ハガキ一葉に二、三句づつお書き下さい
一、投稿先――

〒812 福岡市博多区中呉服町10-14

正定寺 一田牛畝先生宛

〒102 東京都千代田区飯田橋1-11-6

法然上人鑽仰会宛

二 編集後記 二

○春四月ともなれば、新しい息吹き勢いがあふれるばかり。なにかも華やかで、私などは圧倒されてしまう。ゆくりなく繰り返される季節とはいえ、自然の恵みにおのずから頭(こころ)を垂れる。

ああ、イギリスにいるならば、いまはまさに四月、

そしてイギリスで目ざめるものは、

ある朝知らぬまに見るだろう、

楡の木の前まわりの一番低い枝など

や下ばえのそだの束などがほのかに

芽ばえて、

さらに果樹園の枝の上では鶯がさえず

っているのを、

イギリスでは——まさしくいま!

(「故郷への想い・異郷から」より)

これは、ロバート・ブラウニングのあまりにも有名な詩。旅の途上のイタリアにある詩人が、ふるさとの四月の美しさを高らかに歌った詩。まさに四月は、山川草木の万象が目ざめ、新しい可能性に光り輝く季節である。高名な詩人ならずとも、いつの世の、いずこの国の人々でさえ、この時節を心から讃えずにはおられまい。

芝山に日々風つる四月かな

石鼎

美しき春日こぼるる手をかざし 汀女

○本誌の特集シリーズも、「いのちを考える」というテーマから、本号より「自然を考える」という新しいテーマに移して、それぞれの角度からしばらく玉稿を頂戴しようということになった。一人一人の人間が、潤いに満ちた味わい深い人生をまっとうするためには、「自然」とそれこそ自然な協調生活を営まなければならぬ。人の心のありようを、内と外の各方面からまがりなりにも見つめなおしてきた私たちは、今度は私たち人間を広く大きく包み込む自然の本姿を改めて考えなおして、とくには現代という時代における「自然と人間」との関わりを尋ねてみようと思うのである。

「浄土」購読規定

会費一カ年 金二、〇〇〇円

(送料不要)

浄土 四十四卷

四月号

昭和十年五月二日

第三種郵便物認可

昭和五十三年 三月二十五日 印刷

昭和五十三年 四月 一日 発行

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 長谷川印刷 錦

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六

発行所 法然上人顕仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒一〇三 振替東京八一八二一八七番

《出版目録》

〒105 東京都港区芝公園4-7-4 浄土宗宗務支所内

浄土宗出版事業協会

種 別	書 名	規 格	定 価	送 料
浄土選書	① 松濤弘道著 『仏教的生き方とは?』 やさしく人生の歩み方を教える理論 と実践のハンドブック	新書判 268頁	480円	120円
	② 石上善応著 『仏像——その語りかけるもの』 わが心の反映としての仏像の美を見 つめる新しい思索の書	新書判 200頁		
	③ 藤井実応著 『善導大師——生涯と金言』 「古今楷定」の教義の根源を探り、 教化の実態に迫る啓蒙書	新書判 190頁		
	④ 宮林昭彦著 『仏教とその流れ』 仏教とその歴史をやさしく説いた解 説書	新書判 208頁		
美術雑誌	『芸術浄土』② 特集 浄土宗の国宝・魂のふるさと 〜嵯峨野〜 ほか	B 5 判 120頁	980円	160円
	『芸術浄土』③ 特集 浄土宗の国宝(鎌倉篇)・鎌倉 をあるくほか	B 5 判 84頁	880円 1000円 送料実費	
布教シリーズ	①浄土宗の葬祭 (梶原重道著) ③法然上人のおしえ (竹中信常著) ⑤仏前結婚式—その意義と式次第— (後藤真雄著) ⑥無常にめざめよ—善導大師の教え から— (安居香山著) ⑦二河白道—善導大師の教えから— (上田見有著)	B 6 判	1部40円 300部以上38円 500部以上35円 送料実費	
	④月影の歌 (岸信宏親下著)	B 6 判 32頁	1部60円 300部以上55円 500部以上50円 送料実費	
仏教事物解説 カード	①浄土宗 ②南無阿弥陀仏 ③三宝 ④仏壇 ⑤勤行 ⑥お灯明 ⑦数珠 ⑧木魚 ⑨檀家 ⑩中陰	ハガキ判	100部 800円 500部以上 100部 700円 送料実費	
	『浄土伝燈輯要』全一卷 伝燈諸列祖研鑽の一大集裁として明 治初年発刊の和綴三巻を一本として ここに再版	A 5 判 1074頁	7000円	280円
	ポケット判 『浄土宗寺院名鑑』	A 6 判 364頁	1500円(送料共)	
	『浄土宗教師必携』 附1978年教師手帖 資格分限ほか取得事項記入欄、主要 宗規宗綱を掲載	A 6 変型判 本草表紙 本体 120 頁 手帖 124 頁	1500円(送料共) 手帖のみ 600円(送料共)	

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和五十三年三月二十五日印刷 昭和五十三年四月一日発行
第四十四巻 第四号